

モニュメント・場所・比喩

——文学碑の検討から——

大平 晃久

Monument, Place and Trope: A Study from the Consideration of Literature Monument

Teruhisa OHIRA

I はじめに

1. モニュメントと比喩

モニュメント（記念碑）はわれわれの生活空間においてありふれた存在である。この語の語源は「思い出させる」(moneo)「もの」(-mentum)」であるという。その通り、「集合的記憶を統一的に作り上げるための相互行為の装置」(岩崎 2008: 50)、「出来事を、証拠品としてのモノによってではなく、より直接に保存するために意図的に構築された記号」(小川 2002: 54)といった定義がモニュメントには与えられてきた。そして、モニュメントには「何々記念」と明記された、狭義の記念碑だけでなく、慰霊碑や各種の人物像なども幅広く含まれる。

さらに、^{マテリアル}物質的な存在であることもモニュメントの条件である。モニュメントの物質的な形態は、碑やプレート、像に限られず、記念建築、記念公園などまで含まれよう。表象に加え物質性も有するというモニュメントの特性は、「メディア」として(シルバーストーン 2003: 269-278, 上杉 2009: 48)モニュメントをとらえることにつながる。

モニュメントはわれわれの記憶に関わるという意味で、その研究は人間存在の解明という意義を有する。また、モニュメントの表象面に照射した研究は人文社会科学において盛んに行われてきた。そのなかの人文地理学では、マテリアルな存在として景観を構成していることも相まって、モニュメントは研究対象に選ばれてきたといえる。

メディアとしてモニュメントを考える場合、多義的なテキストがモニュメントから読み取られることをみる必要がある(Duncan and Duncan 1988)。モニュメントにはその建立者によって様々な意味が与えられている。しかし、そうした建立側の意図は見る側に正しく伝わるわけではないし、見る側は独自の多様な読みを行いうる。さらに、見る側の意味の読み取りは重層的である。直接、ただ碑文を理解するレベルから、そのモニュメントの地域社会における位置づけまで、われわれは多様に、多重に、モニュメントの意味を読むことができる。そのうえ、モニュメントは、一般にテキスト、オブジェ、書が複合したメディアである。テキストとオブジェのそれぞれが別個のメッセージを伝えるような場合もあり¹⁾、モニュメントの意味はさらに複雑化しうる。

1) 何も無いこと自体がモニュメントとなる可能性さえあるが、ここでは取り上げない。

メディアとして、そして多義的なテキストとしてモニュメントをみる。本稿は後者に重点を置き、モニュメントが場所との関係でどのような意味作用を有しているか、いいかえれば、モニュメントと場所との協働から、われわれはどのようなメッセージを読み解いているか、考察していく。むろんこのことは、前者のモニュメントのメディアとしての把握へとつながる。

モニュメントの場所との関わりにおける意味作用を、以下では比喩として読み解いていく。ただし、テキストであり表象であるモニュメントに意味作用が読み取れるのは当然であり、比喩をわれわれの重要な認知能力とみる限り、モニュメントの意味作用を比喩として読み解けることもまた当然である。とはいえ、具体的にどのような意味作用を有するのか、またモニュメントのそれは表象一般と違いはあるのかなど、検討の余地は残されている。場所に関わる意味はモニュメントの意味作用のうち、文脈に関わる一部に過ぎないが、決して小さなものではない。

2. 文学碑

モニュメントの意味作用を考えるにあたって、本稿では文学碑を事例として取り上げる。ここで扱う文学碑とは、「句碑・歌碑・詩碑など広く文学にかかわる碑を総称」（宮澤・本城 2006: 15）するものとしておく。文学作品が表記されていることを条件とし、文学作品が表記されていない、単なる作家の顕彰碑、文学上の出来事の記念碑などは除外する。ただし、こうした定義はさほど重要ではない。本稿の目的は文学碑ではなくモニュメントを考えることであるし、そもそも文学作品とは限定しがたいものである。映画やアニメのキャラクターは文学作品といえないのか、また、一般人の和歌や句を刻んだ慰霊碑は文学碑といえるのかなど、厳密に決めがたいし、本稿ではする必要もない。

そして文学碑には、前節でみた記憶に関わるという意味でのモニュメントに該当するものも含まれる。逆にいえば、美術館や彫刻公園の彫刻と同様、文学碑で（上述の意味の）モニュメントとはみなせないものは数多い。また文学碑では、碑表には文学作品が刻まれるが、碑陰には「何々記念」とあるものが珍しくない。彫刻作品が載ったモニュメントと同じく、文学作品がモニュメントの装飾のような位置づけになっている。これらはそもそもモニュメントであるが、同時に文学碑であり、文学碑としての意味作用がそこでは起こっているとみたい。

モニュメントの考察にあたって、迂遠にも文学碑から議論を起すことの理由は2つある。1つは、上述した、記憶に関わるという意味でのモニュメントよりも、文学碑の方が明らかに広い外延を有しており、モニュメントであることを前提せずにモニュメントを考えることができるからである。文学碑には上述の意味でのモニュメントでないものが多数含まれる。また、数が多く、一作品に複数の碑があっただけでなく、モニュメント—非モニュメントの境界的な存在が文学碑であり、モニュメントを突き詰めて考えるのに適していると考えられる。もう1つは、文学碑が1つのジャンルとして確立しているが、モニュメントの文脈ではほとんど議論されてきていないためである。同様にモニュメントとしては境界的・周辺的な存在であるパブリックアートと比べても、文学碑は等閑視されてきたといえるだろう。

本稿では、文学碑の具体的な事例をあげながら、場所と関わるなかでの、文学碑、そしてモニュメントの比喩的な意味作用を明らかにしていく。文学碑の事例は、原則として岐

阜県，愛知県から選んだ。ただし，両県の事例でしか議論が成立しないわけではもちろんないし，両県の文学碑を網羅的に検討するものでもない。以下，Ⅱでは，比喩の意味作用を概観したのち，文学碑の事例から，メトニミー，メタファー，シネクドキの3種の比喩の働きをみる。次いでⅢでは，モニュメントに焦点を移し，比喩の意味作用がどのように働いており，そこにどのような特性がみられるか論じる。

Ⅱ 文学碑と場所の比喩

1. 認知意味論における比喩

「男はオオカミだ」，「鍋が煮えている」，「お花見」はそれぞれ，典型的なメタファー表現，メトニミー表現，シネクドキ表現であるが，かつてこれらは，正常な表現から逸脱した文彩（言葉のあや）として理解されていた。しかし，言語を認知システムの一部とみなす認知意味論の立場からは，比喩表現は一般的な認知能力が言語化されて現れたものとしてとらえられる（辻 2003: 12）。

メタファーは，かつては類似性に基づく転義と定義されてきたが，それ以上にわれわれ人間にとって重要で基本的な認知の枠組みである。例えば，「大きな音」や「精神的にハイ」というメタファー表現は，ある（とらえにくい）領域（聴覚，心理状態）を別の（よりとらえやすい）領域（視覚，空間）でとらえる認識に基づいている。例えば大・小，上・下という概念・表現が別の領域に意味的に拡張されているのであり，本稿ではメタファーを「基点領域群から目標領域への領域間の写像に基づく意味拡張」と定義しておきたい²⁾。

メトニミーは，かつては隣接関係に基づく意味の転義と定義されてきたが，参照点構造 reference-point construction に基づいた，われわれの重要かつ基本的な認知の枠組みとして現在は理解されている。すなわち，「鍋が煮えている」という表現は，外からみえない鍋の中身に代わり，容易に目に付く入れ物としての鍋を参照点として設定する認知プロセスに基づく。メタファーが領域間の写像であるのに対し，メトニミーは（鍋と中身の料理のように）同じ概念領域内で起こっており，いいかえれば，（参照点である）「鍋」という概念・表現がその中身にまで意味的に拡張している。本稿ではメトニミーを「参照点構造に基づく同一領域内での意味拡張」と定義しておきたい。

メトニミーは，参照点としての場所に意味を与え，場所を整除してとらえることを可能にする認知能力であり，認知プロセスである（大平 2010）。後述するように，モニュメントは基本的にメトニミーに基づく。

シネクドキは，かつては全体と部分の関係による文彩であるとされてきた。しかし，現在では全体・部分関係のうち現実の空間的包含関係はメトニミーの一種として区別し，意味的な包含関係のみをシネクドキとして考察が行われている。シネクドキには「花見型」と「ごはん型」の2種類があり，そのうち，「桜を見る」という意味での「お花見」という表現の場合，「花」カテゴリーよりも「桜」カテゴリーが意味的に下位であり，上位カテゴリーから下位カテゴリーへ「花」の意味が特殊化されている。一方，「食事」一般を指す「ごはん」の場合は，下位カテゴリーの「ごはん」から上位カテゴリーの「食事」へ

2) レイコフ (1993: 333-337) は基点領域から目標領域への領域間の写像 **mapping** としてメタファーを定義したが，複数の基点領域が1つの目標領域に写像されているという見方も強いため，「基本領域群」としておく。

と「ごはん」の意味が一般化されている。このように、カテゴリーの階層構造のなかで対象をいろいろなレベルの詳しさでとらえる、われわれ人間の基本的な認知能力がシネクドキの基盤になっている。ここでは「カテゴリーの包含関係に基づく意味拡張」としてシネクドキを定義しておく³⁾。

メタファー、メトニミー、シネクドキの3種の比喩について、瀬戸 (1986: 49-56) はその3つで我々の認識の基礎が構成されるとし、「認識の三角形」として示している。また楠見 (2005: 26-27) は、言語表現として比喩をとらえる立場ではあるが、瀬戸を引き継ぎ、意味拡張の3類型として3つの比喩を位置づけている。3つの比喩が認識、意味拡張の3類型であるなら、モニュメント・文学碑の意味作用の3類型、あるいは記憶の3類型⁴⁾として、これら3つの比喩をとらえることも可能であろう。

前章で述べたように、本稿ではモニュメント・文学碑を、メディアとして、さらに多義的なテキストとして位置づける。モニュメント・文学碑には、建立側の様々なメッセージが読み込まれているし、われわれはそれとは別に様々な意味を読みとることが可能である。以下では、建立側の意図として見る側が想像するであろう、モニュメント・文学碑の意味作用を主な対象とし、かつ、場所に関わる意味作用に限って論じたい。また、重層的な意味作用のうち、副次的な意味作用 (コノテーション) も含めている。

以下、場所におけるモニュメント・文学碑をみるうえで最も基本的な比喩であるメトニミーを最初に、次いでメタファー、シネクドキの順でみて行く。

2. メトニミー

さきにメトニミーを、「参照点構造に基づく同一領域内での意味拡張」と定義した。文学碑についてこれは、その場所との何らかのゆかりに基づいて文学碑が建てられているということに他ならない。そして、ゆかりとは作品や作者に関わる事がらすべてであるから、文学碑が建てられうる場所は作品に描かれた場所、作品が執筆された場所、作者が住んだ場所、作者が生まれた場所、作者が死去した場所など多様である⁵⁾。また、参照点、つまりゆかりによって結び付けられる場所とは、文学碑の建てられた場所、あるいは文学碑そのものということになる。通常はその場所か文学碑かは分けがたく、むしろ渾然一体となっていることが地理的であるとも考えられるが、以下ではいったん分けて考察を進める。

(1) その場所と作品、作家、文学史上の出来事との関わりが文学碑によって示されること

3) なお、表現ではなく認知プロセスとしてのシネクドキを考える場合、カテゴリーといっても確定したものとは限らない。一時的に、(例えば「日帰り旅行に持って行くもの」というように) 上位カテゴリーが仮構される事態も含めて (森 2002: 81-82, ラネカー 2000: 76-77), シネクドキとして考えたい。

4) 木岡伸夫氏の示唆による。

5) 作家ゆかりの場所としては、生地、居住地、死去地、滞在地、母校、勤務先、…など、広く認められようが、ゆかりの程度には差がある。一例として、新見南吉の「ででむし碑」が安城高校 (愛知県安城市) の移転に伴って新校地に移された際 (1979年) に起こった移転反対運動を示したい。作家が勤務していた場所 (旧安城高等女学校、新製の安城高校) に比べ、作家が勤務していた組織が所在する場所 (安城高校新校地) は、文学碑の場所にふさわしくないというのが反対側の主張であった (小野 2008: 35-38)。なお、この「ででむし碑」は2013年に安城高校旧校地 (現、安城市立桜町小学校) に戻されている。

最も数が多い、典型的な文学碑がこのパターンである。事例は極めて多いので、岐阜公園（岐阜市）とその周辺から選んでみると次のようになる。

「鶉の川の迅さよ時の流れより」（図1）：これは山口誓子が1956年に岐阜を訪れた時の句が刻まれた文学碑の典型例で、いうまでもなく作品がここ岐阜に関わっている。

「すずめの子一尺とんでひとつとや」：岐阜で活動した俳人、長谷川双魚による句を刻んだ碑である。作品もこの場所に関わっているが、作家ゆかりで建立されたといえよう。

「たのしみや松に隠れしけふの月」：三浦栲良の句で、作者は1773（安永2）年に岐阜に滞在している。作者も作品も岐阜との関わりは薄い⁵が、碑陰には「狂俳始祖栲良翁二百回忌 東海栲流会創立三十周年記念」と刻まれ、文学史上の出来事が理由でここに文学碑が建立されていることがわかる。

他の場所のこうした文学碑の事例を示すと、作品に由来する文学碑としては、大垣（岐阜県）など各地の芭蕉句碑、知立（愛知県）や恵那（岐阜県）の西行句碑などがすぐ思い浮かぶ。作家ゆかりの碑も半田（愛知県）や安城（同）の新見南吉関連の碑など数多く、文学史上の出来事ゆかりの碑はそれらに比べると少ないものの、芭蕉ほかの句が刻まれた「蕉風発祥之地」（名古屋市）などをあげることができる。

また、これらゆかりに基づく文学碑は多数あってよい。典型的な事例をあげれば、芭蕉の「何とはなしに何やら床し董草」という句は名古屋の熱田で詠まれたとされ（栗田2017: 382）、熱田区白鳥1丁目地内に3基の句碑がある（弘中2004: 30・341）。これらは新旧の差はあるが、いずれもゆかりのある碑としてみなされよう。このように同じ句や歌の碑が市内に複数あることは珍しくない⁶。

また、もともとの作品は場所を特定していなくても、建碑するためにはどこかに特定せざるを得ない。例をあげると、長塚節歌碑（岐阜県各務原市）の歌には「各務が原」という広域地名が歌いこまれているが、他の多くのモニュメントとともに各務原市民公園に建てられている。こうした例はごく一般的である。

さらには、本来はゆかりがなくても、碑を建てることでゆかりの創出をめざす例もある。『万葉集』巻一の「引馬野にはほふ榛原入り乱り衣にはほせ旅のしるしに」（長寸守奥麿）⁷に詠まれた引馬野は、定説では愛知県豊川市御津町内であり、同地の引馬神社には歌碑もある。ただし諸説あり、なかでもかつて賀茂真淵が唱えた説に従い、県境を越えた静岡県浜松市内にも、市役所前と市内北部の旧曳馬町に建碑されていることが興味深い。こうした事例は珍しいものではなく、一宮市（愛知県）の萬葉公園にある『万葉集』巻十の「高松」をうたう6首の歌碑は、それらが同地を詠んだ歌か否かという高松論争の末に建立されたものである（吉田1979: 31）。

(2) その場所と何らかの特性との関わりが文学碑によって示されること

瀬戸（1997: 160-165）は、「特性のメトニミー」として‘beauty’という特性がそれを備えた「美人」を指すこと、会話のなかでは‘a three-o'clock’が例えば「3時の会議」を指すこと、またそれらの逆で、「オレンジ」が「オレンジ色」という特性を指すことなど、豊富な事例を示している。それらは瀬戸によれば、対象と特性が認識上は隣接関係にある

6) 後述する一般モニュメントの場合、同じ事象を記念するモニュメントが近くにあるようなことは考えにくい。むしろ、桶狭間古戦場のように、正統性を争い、近接する2か所にモニュメントが競うように建立されることはあるが、それは別問題である。

ために生じている。一見すると、上述の「鍋が煮えている」とは異なった表現であり、認識方法に思えるが、何かをより目立つ参照点に結び付けてとらえるというメトニミーの構図にあることに違いはない。これら特性もここでは文学碑によって示されるゆかりの一種ととらえる。

特性は文学碑に明記されているわけではなく、常に重層的な意味作用のうち副次的なものでしかない。具体例は次のようなものである。

「川端康成ゆかりの地」碑（岐阜市）：碑陰に『篝火』の一節が刻まれ、作家と作品双方で上記(1)のメトニミーになっている。この碑からは「文化的」、あるいは「ロマンチック」といった特性を岐阜に結び付けることが期待されているように思える。

このようにとらえることのできる文学碑は多い。当然ながら古い碑の場合は建立側にこうした意図があったとは思えない場合がほとんどであるが、例えば岐阜県羽島市の中心部（竹鼻）に複数の古い芭蕉句碑があることをみたり知ったりすれば、「歴史的」という特性を竹鼻の町に結び付けて理解する人が多いだろう。

また、個々の碑ではなく、文学公園全体として、特性のメトニミーになっている例もある。岐阜県揖斐川町の「文学の里」は上記(1)のメトニミーに該当する碑も含むが、多くはこの地に関わりのない歌碑・句碑群で構成されている。全体として「文化的」という特性のアピールを感じられよう。同様の例は名古屋市東山公園の「万葉の散歩道」など、数多い。

なお、後述するが、こうした特性のメトニミーはシネクドキと重複して意味作用を行っていると考えられる。

(3) 文学碑そのものと作品、作家、文学史上の出来事との関わりが意識されること

文学碑の建立後は、場所ではなく碑が参照点になりうる。作品、作家、文学史上の出来事が文学碑に結び付けてとらえられるということであり、文学碑がシンボル化しているといえる。ただし、参照点が場所か文学碑かは区別が付かないことが多く、それはスケールの問題でもある。

しかし、文学碑が有名な場合や、文学碑に個人的な思い入れがある場合（これは建立側も見るとありうる）には、こうしたメトニミー認識が起こるのではないか⁷⁾。例えば、図2中央の奥の細道むすびの地の「蛤塚」碑（岐阜県大垣市）は有名な芭蕉句碑で、観光などの場面でよく写真が使われる。こうした碑であれば、「蛤のふたみに別行秋そ」という句そのもの、あるいは奥の細道という出来事が結び付けられることも、人によってはありえよう。

(4) 文学碑と、作品の舞台、作者ゆかりの地、文学史上の出来事の間そのものとの近接が意識されること

これは、作品、作者、文学上の出来事の厳密な位置を、参照点である文学碑からとらえるということである。例えば、文学碑を訪れて、実際に句が読まれた家は少し離れている、あるいは作家の生誕地とあるが正確には100mほど離れている、といった認識をすることは珍しくない。細かいスケールで文学碑周辺をとらえた場合に起こるメトニミーである。

(5) 文学碑によって、その場所と他の地域との関係が意識されること

7) 「彼らしい飾らない碑だ」といった発想は、こうした碑と作品または作者の結び付きの上に成立すると思われる。



図1 山口誓子句碑
岐阜市，2011年撮影。



図2 奥の細道結びの地
岐阜県大垣市，2011年撮影。



図3 野ざらし芭蕉道
岐阜県笠松町，2011年撮影。

文学碑の碑表にある作品中の地名，あるいは碑陰の解説や建立者の表記から，その場所を参照点として，他の地域をとらえることである。瀬戸（1997）がメトニミーの類型のうち「入れ物で中身」，「中身で入れ物」，「一般的な隣接」として論じているもので，それぞれ，その場所を含むより広域の地域，その場所に空間的に含まれるより狭い地域，近接する地域を，その場所との関わりからとらえることが該当する。

ただし，多くの場合，文学碑の碑表あるいは碑陰のテキストから，地名という単なる一単語をメッセージとして受け取っているのみで，作品や碑全体をメッセージとしてとらえるものではない⁸⁾。そのため，これらは文学碑の意味作用としては周辺的であり，連想レベルというべきであろう。なお，この意味作用もシネクドキと重複して起こる。

3. メタファー

メタファーは「基点領域群から目標領域への領域間の写像に基づく意味拡張」と定義できる。これは文学碑においては，その場所と他の場所との何らかの類似性に基づいて文学碑が建てられているということである。メトニミーの意味作用が明瞭な事例に比べて，メタファーの意味作用がはっきりと指摘できる事例は少ない。しかし，文学碑の意味を考えるにあたって重要であることを以下では示していく。

(1) 文学碑によって，その場所が他の場所と類似するものとして意識されること

これは，その場所を他の場所に見立てることといいかえてもよい。他の場所が基点領域，その場所が目標領域になっている。

「山路来て何やらゆかし菫草」（岐阜県中津川市）：よく知られた芭蕉の句で，弘中（2004：36）によれば，全国に46基，岐阜・愛知両県だけでもそれぞれ5基・1基ある。この句は京から大津への志賀越道で詠まれたとされ，この句が刻まれた碑は，中津川のものを含め，句の通り山道に建てられているものが多い。

「ほたるこい」（岐阜市）：文部省唱歌で，明確なモデルの場所は知られていないようである。岐阜公園内の，蛍が飛びそうな流れの脇に碑が建てられている。

これらの事例では，字義的に正しい，つまり山道であったり蛍がみられそうであったりする場所に碑は建てられている。2つの場所の類似，見立てに基づいてこれらの碑は建てられ，われわれ見る側も類似性を感じているといえる。起点領域である「他の場所」は，

8) ただし，建立側がそうした意味作用を期待している場合は，文学碑の意味作用とみることができると。また，碑文で意図的に市町村合併による新市名を明示したり，さらにはある国家の領域に含まれることを含意するような例もありえよう。

後者の例のように明確には存在しなくてもよい。またフィクションの場所（地獄、文学作品中の場所、映画中の場所）であったり、極端な場合、コンピュータ基盤のようなものであっても成立しよう。

なお、芭蕉の「折々に伊吹を見ては冬籠り」は、大垣城下の大垣藩士岡田千川邸で詠まれた句であるが、大垣市中心部の1基のほか、岐阜県内に5基、滋賀県内に3基の句碑がある⁹⁾。いずれも伊吹山がみえる範囲であり、これらもここでみてきた場所間の類似を提示するメタファーである。一見すると、程度の差はあれ伊吹山に近接しているといえなくもなく、すべて前節のメトニミー(1)としてみるべきだと考えるかもしれない。しかし、上述の「山路来て」などと同じく、2つの場所の類似、見立てに基づくもので、類似性を喚起する対象が「葦草」や「山路」ではなく「伊吹山」という固有名になっているだけである。句碑のあるその場所に「折々に」という句とのゆかりがあるわけではなく、句碑がそのような主張をしていると受け取ることもできない。

(2) 文学碑によって、今のその場所がかつてのその場所と類似するものとして意識されること

かつてのその場所が基点領域、今のその場所が目標領域で、今のその場所をかつてのその場所に見立てることである。

「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市^{あゆち}潟潮干にけらし鶴鳴き渡る」(名古屋市)：『万葉集』巻三の高市黒人の歌碑で、上記メトニミー(1)でもある。碑をみて、かつての干潟を眼前の住宅地に投影するという意味作用は、同じ場所とはいえ、上記の異なる場所間に類似性をみいだすのと同じである。このようなメタファーの意味作用は多くの碑で起こりうるのではないか。

(3) 文学碑によって、他の場所／かつてのその場所が(今の)その場所と類似するものとして意識されること

これは上記の(1)・(2)の逆で、(今の)その場所が基点領域、他の場所／かつてのその場所が目標領域になっている。他の場所／かつてのその場所に思いを向け、(今の)その場所に見立てることといってもよい。

上記の(1)・(2)でみたような事例のどれでも起こりうる。(2)の「年魚市潟」は景観の変化があまりに激しいために、今のその場所を過去に投影することは難しいかもしれないが、不可能ではない。万葉歌碑であっても、例えば養老の滝(岐阜県養老町)を詠んだ『万葉集』巻六の歌であれば、いにしへの歌人(大伴東人^{あづまひと})も同じように眺めたと想像することは容易であろう。

(4) 文学碑(群)が現実の縮小模型として了解されること

現実の縮小模型もメタファーである。具体例としては大垣の「ミニ奥の細道」がある。これは奥の細道の代表的な21句の碑を順にたどり、「蛤塚」(図2)で結びとなるものである。名古屋東山公園の「万葉の散歩道」のように文学公園でテーマを設定してあるところは散見されるが、形は全く類似していなくても何か明確なモデルに基づいた縮小模型になっている例は珍しい。なお、これも見立てであり、基点領域(本州東部)と目標領域(大垣中心部)で説明できる。また、大垣「ミニ奥の細道」は、結びの地で現実の場所につな

9) 弘中(2004: 23)から愛知県江南市の1基を削除し(私有地で確認不可)、新しく建立された滋賀県米原市の1基を加えた数。なお、各句碑に刻まれた句には若干の揺れがある。

がっている点でも特別であり、興味深い。

4. シネクドキ

上述したように、シネクドキはカテゴリーの包含関係に基づく意味拡張であり、「花見型」(上位カテゴリーでとらえる)と「ごはん型」(下位カテゴリーでとらえる)がある。ただし、文学碑の場合、比喩の意味作用として提示することに意義があるのは、次の「花見型」のみである。

(1) 文学碑がその場所の類型的な意味づけを提示すること

文学碑がその場所を一般名上位カテゴリーでとらえることに関わる事例がある。上記メトニミー(3)で扱った例であるが、「川端康成ゆかりの地」碑、羽島市竹鼻の芭蕉句碑から、それぞれ岐阜を「ロマンチックな町」、竹鼻を「歴史的な地」ととらえ、揖斐川「文学の里」から揖斐川を「文化的な町」ととらえるようなことが該当する。なお、これはもっとスケールの小さな場所でも同様で、例えば、西行歌碑があることから、月の宮(岐阜県瑞浪市)を非常に小さいけれども「由緒ある神社」なのだろうと判断するようなことがあろう¹⁰⁾。

これらはすべて、上述した特性のメトニミーと重複している。ある「特性」とその「特性をもつ場所」とが流動的であるのは当然といえようが、瀬戸(1997)が‘beauty’や‘homeless’といった語では特性から人物に意味が移行していると論じるのをみると、上記の「川端康成ゆかりの地」碑なども、特性のメトニミーよりもシネクドキとみる方がしっくりくるといえるかもしれない。いずれにせよ、こうしたシネクドキは、建立側の意図しない事例も含む、ありふれた日常的な意味作用である¹¹⁾。また、副次的な意味作用である。

(2) 文学碑によって、その場所を上位(広域)の場所/下位(より狭域)の場所としてとらえること

文学碑が関わるシネクドキの意味作用として、あえて提示するならば、このようなものがある。文学碑(碑表あるいは碑陰)をみて、馬籠は信濃国に含まれていたということに気付いたり、あるいは、ここは名古屋でも金山という地区なのかと知ったりすることがこれに該当する。ただ、これらは碑全体のメッセージではなく、連想レベルというべきであろう。なおこれらはメトニミー(5)と重複している。

5. 3種の比喩の組合せ

以上、文学碑がどのように場所に関する意味作用をみせているか、メトニミー、メタファー、シネクドキの3種の比喩に分けて示してきた。

ここでは小括を兼ね、これらメトニミー、メタファー、シネクドキが、ある特定の文学

10) 類似したシネクドキとして、作品・作家・文学的出来事を上位カテゴリーでとらえるのに場所が関わる事例を指摘できる。例えば、「市の中央広場にあるので、有名な作品の碑なのだろう」、「小さな児童公園にある文学碑なので、大した作家ではないのだろう」のように、建立場所が作品・作家・文学的出来事をいわば格付ける事態である。ただし、本稿で対象とする空間・場所の意味作用ではない。

11) 前掲3)でみた上位カテゴリーが仮構される事態であり、多様な意味作用が起こりうる。そのなかには、近接する複数の無関係な歌碑を場所つながりでグルーピング・上位カテゴリーを仮構することで、類似性があるかのように思ってしまう錯誤や、文学碑の建立場所と、作家の活躍した町/舞台を結び付け、上位カテゴリーを仮構することで、両者に類似性を感じるような錯誤もあり得よう。なおこれらは類似性が感じられてもメタファーではない。

碑においてどのように表れているかを、岐阜県笠松町の「野ざらし芭蕉道」(図3)を例に確認しておきたい。まず、「野ざらし芭蕉道」の3つの芭蕉句碑のうち2つに刻まれた句は、笠松あるいはその付近で詠まれたものとされている(メトニミー(1))。ただしともに存疑句とされる。これらの碑をみることによって、現在の木曾川河川敷にかつての川港の姿をみようとしたり、逆に、現状からかつての川港の姿をとらえようとする(メタファー(2)・(3))。また「野ざらし芭蕉道」と大きく刻まれた碑には「野ざらしを心に風のしむ身哉」という『野ざらし紀行』の出立の句も刻まれ、これは江戸の出立の場面をここに見立てているといえようか(メタファー(1)・(3))。さらに、この碑群は、「歴史的」・「交通の要」という特性がこの笠松の町にあることを示し(メトニミー(2))、「歴史的な地」・「交通の要衝」として笠松をとらえさせる(シネクドキ(1))。

すべての文学碑において3種とも読みとれるわけではないが、メトニミー、メタファー、シネクドキの3種の比喩の組合せとして、文学碑の行う場所の意味作用を提示できる。



図4 芭蕉塚
岐阜県岐南町、
2011年撮影。

Ⅲ モニュメント

前章では文学碑について場所に関わる比喩の意味作用を整理した。これら文学碑の一部が、Iでみた記憶や過去認識に関わるという意味でのモニュメントに分類できることは言うまでもない。すぐ上で検討した笠松の「野ざらし芭蕉道」碑群も、芭蕉が笠松を通り句を詠んだという記憶に関わるモニュメントであるといえる。逆にいえば、モニュメントにおいても3種の比喩が意味作用に大きな役割を果たしていることはこのことから明らかである。

本章では、文学碑をめぐる検討に補足・追加しつつ、モニュメントについて場所に関わる比喩の意味作用がどのように働いており、どんな特徴が見出せるか論じる。その際、メトニミー、メタファーを取り上げ、シネクドキは前章でみたように、メトニミーと重複して表れるため、ここでは補足的に扱う。

1. モニュメントを成立させるメトニミー

前章のメトニミー(1)・(3)は典型的な文学碑における意味作用である。かつ、それらが見いだされる文学碑は、作品、作者、文学史上の出来事における何らかのゆかりを記憶し、記念するという意味でモニュメントに他ならない。そして、ゆかり、つまり、参照点構造で何がどのようにその場所(あるいは文学碑そのもの)に結び付けられるかはさらに多様である。以下ではそのことから考えたい。

図4は岐阜県岐南町にある芭蕉の句碑で¹²⁾、「芭蕉翁」と大きく刻まれている。一見するとその場所とは無関係な碑であるが、これはメトニミーに基づくモニュメントに分類できるものである。こうした碑は「芭蕉塚」と呼ばれ、芭蕉の門流の団体によって師である芭蕉を顕彰するために建立された¹³⁾。蕉門の活動、すなわち芭蕉に関わる文学史上の出

12)「蝶の飛はかり野中の日陰かな」。碑の脇の解説板はこの句をここで詠まれたものとしているが、それは一般には認められていない。なお、この碑の所在地の地名は野中である。

13) 芭蕉の門流団体が建立した芭蕉塚は数多く、全国で(全芭蕉関係碑3,239基のうち)192基、中に

来事とその地域との関わり(=メトニミー)を示す碑であり、その意味で芭蕉関連のモニュメントと呼びうるものである。

顕彰団体の活動までその人物のモニュメントのゆかりに含まれることを、やや迂遠ではあるが、墓石の事例をもとに考えてみたい。民俗学者の新谷(1991: 119-120)は、埋葬地と墓石が離れた両墓制墓地を検討するなかで、石塔(墓石)は「ハカ」(埋葬墓地)、「ムラ」(集落)、「テラ」(寺院やそれに類するもの)の吸引力と反撥力によって、「ハカ」、「ムラ」、「テラ」のいずれかに建てられると論じた。墓石は慰霊碑、モニュメントの一種とみることができる。「ハカ」、「ムラ」、「テラ」を、より広く個人顕彰という文脈に読み替えるなら、「ハカ」は死去地、「ムラ」は生家や活動した地など、「テラ」は顕彰される地ということになろう。芭蕉塚は「テラ」、つまり顕彰される地に建てられている。「テラ」、つまり顕彰される地まで、ゆかりの地、メトニミーの参照点になりうる、あるいは、ゆかりの地、メトニミーの参照点として作り出されうるとみななければならない。

一般のモニュメントで、このように顕彰される地(「テラ」)に碑が建てられ、ゆかりの地、モニュメントとみなされる事例として、各所でみられる「御大典記念」碑、愛知県西尾市三ヶ根山上の多数の旧軍関係慰霊碑をあげておきたい。前者は天皇の即位礼を記念・顕彰して建てられたもので各地に多数存在する。後者はそれぞれの部隊などとは何の関係もない山中(ただし極東軍事裁判刑死者の「殉国七士廟」に隣接する)に建てられているものである¹⁴⁾。いずれも芭蕉塚と同様、その場所と事象そのものにはゆかりはないが、顕彰される地に顕彰側の都合で建立されたモニュメントとしてとらえられる。

このように、顕彰される地までゆかりの地、すなわち参照点に含め、メトニミー(1)・(3)の作用するものをモニュメントとして分類することができる。さらに、前章のメトニミー(2)で検討した、特性のメトニミーによる碑もモニュメントとしてみなせることを示したい。

早い時期からパブリックアートについて発言している研究者で、アーティストとして作品も発表している竹田は、モニュメントを「社会的メッセージ」を有するものと定義している(竹田 1997: 6)。竹田は、碑文などには明示されていないが、「平和」や「発展」といったメッセージが込められたパブリックアートをモニュメントとして位置づけるために、このようなモニュメントの定義を提示している。これは、一見すると、Iで取り上げた記憶や過去認識に関わるものというモニュメントの定義とは反する。しかし、「社会的メッセージ」の内包は広く、過去の何かに意義を認め記念・顕彰するということも社会的メッセージに他ならないと考えることができる。

前章でみた文学碑が伝える特性、すなわち、文化的、歴史的、ロマンチック、…は、社会的メッセージに他ならない。竹田が論じるように、社会的メッセージを有する造形物はモニュメントとみなされてきた。文学碑そしてモニュメント全般について、社会的メッセージたる特性のメトニミーの作用する碑も含めて考察する必要がある。

以上、モニュメントがメトニミー(1)・(3)、そしてメトニミー(2)によって成立し、それらメトニミーを作用させるメディアであることを、前章の考察をもとにみてきた。テキストとしてのモニュメントにおける、場所に関わるメトニミーの意味作用は、次のよう

は「芭蕉墓」と刻まれるものも全国で19基ある(弘中2004: 2・42)。

14) 建立場所とのゆかりはないが、建立場所がどのような場所かは重要である。このことは前掲10)。

にまとめられる。ただし、メトニミーと重複するシネクドキも含めた。なお、(1)～(5)はいずれも前章の該当部分に対応している。

メトニミー (1)・(3) : その場所と (過去の) 様々なこと, 人との関わりがモニュメントによって示されること・モニュメントそのものと (過去の) 様々なこと, 人との関わりが意識されること。なお「様々なこと」には顕彰団体の活動も含む。

メトニミー (2)・シネクドキ (1) : その場所と何らかの特性との関わりがモニュメントによって示されること・モニュメントがその場所の類型的な意味づけを提示すること。

以上が主要なメトニミー・シネクドキであり、メトニミー (1) とメトニミー (2) が、モニュメントをモニュメントたらしめる意味作用である。

なお、以上の他にモニュメントにおけるメトニミー・シネクドキとして次のような意味作用も指摘できる。ただし、これらは周辺的な類型であり、次節のメタファーの考察からは除外する。

メトニミー (4) : モニュメントと、(過去の) 様々なこと, 人との関わりのある場所との近接が意識されること。ただし、モニュメントにおける意味作用としては付随的というべきであろう。

メトニミー (5)・シネクドキ (2) : モニュメントによって、その場所と他の地域との関係が意識されること・モニュメントによって、その場所を上位 (広域) の場所/下位 (より狭域) の場所としてとらえること。II で述べたように、多くの場合は連想レベルの意味作用に過ぎない。

2. モニュメントを彩るメタファー

前章で文学碑について検討したメタファーのパターンをモニュメントについて示すと、次の (1)～(4) になる。これらは前節でみたメトニミー (1)・(3), メトニミー (2) と重複してモニュメントに意味作用を行っている。

- (1) モニュメントによって、その場所が他の場所と類似するものとして意識されること
- (2) モニュメントによって、今のその場所がかつてのその場所と類似するものとして意識されること
- (3) モニュメントによって、他の場所/かつてのその場所が (今の) その場所と類似するものとして意識されること
- (4) モニュメント (群) が現実の縮小模型として了解されること

メタファーはメトニミーのようにすべてのモニュメントの構築に関与しているわけではない。しかし、モニュメントの一部は、メタファーによって成立し、メタファーを喚起するメディアであり、テキストとしてみたモニュメントの意味作用においてもメタファーは重要な役割を果たしている。そのことを、以下では、モニュメントに多いと考えられる、過去見立てのメタファー (2)・(3)¹⁵⁾を中心にみていくことにする。それらをみた後に、他所見立てのメタファー (1)・(3) についても触れたい。また、これらの検討は、前節メトニミー (1)・(3) と重複するパターンが中心になるが、前節メトニミー (2) と重複す

15) メタファー (3) は「他の場所/かつてのその場所が (今の) その場所と類似するものとして意識されること」であるが、ここではそのうち、かつてのこの場所を今のこの場所を通してみることに限定して論じる。また、次のメタファー (1)・(3) の部分でも、メタファー (3) のうち他所をここを通してみる事例に限定して取り扱う。

る事例もメタファー (2)・(3)、メタファー (1)・(3) のそれぞれで取り上げる。なお、以下ではやや周辺の類型であるメタファー (4) は取り上げない¹⁶⁾。

さて、過去見立てのメタファー (2)・(3) (かつメトニミー (1)・(3)) のパターンから検討していこう。前章でみたように、多くの文学碑は、何らかのゆかり=メトニミー的關係のある場所に建てられ、モニュメントになっている (メトニミー (1))。歌や俳句が詠まれた場所であるなど、作品と場所にゆかりがあり、さらに碑文に過去のその場所の風光が表現されている場合、今のこの場所とかつてのこの場所との間の類似性が意識され、見立てが喚起されやすい (すなわち、メタファーが作用しやすい) のではないか (メタファー (2)・(3))。逆にいえば、明確な舞台がない、文学碑のある場所が舞台ではない、碑文に風光が読み込まれていないような場合は、メタファーは働きにくいように思われる。作家の生家や死去地にある文学碑でこうしたメタファーが作用するのは、見る側がその作家に思い入れを持つ場合に限られよう。

今のこの場所をかつてのこの場所を通してみる、かつてのこの場所を今のこの場所を通してみる、この見立てのメタファーの2つのパターン (メタファー (2)・(3)) は随時切り替えが起り、実際にはどちらとも決めにくい。あえて分けると、普通に起きやすいのは、今のこの場所をかつてのこの場所を通してみるというメタファー (2) であろう。これでも十分に文学的、ないしは歴史地理的なまなざしで、誰もがどこでも「昔はこうだったのか」とみようとするわけではない。一方、それとは逆の、かつてのこの場所を今のこの場所を通してみるというメタファー (3) は、よりエモーショナルであるように思われる。文学碑の前に「万葉の歌人も、この眺めを楽しんだのか…」というような感慨を抱くには、その歌への思い入れが必要である。

こうした文学碑にとって、メタファーの意味作用は常に起こるものではなく、必須でもない。しかし、こうした見立てのメタファーがなければ、文学碑は標識に近いものであり、味気ないものではないだろうか。

著名な万葉学者で多くの万葉歌碑を揮毫した犬養は、自身が初めて揮毫した「采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたずらに吹く」(『万葉集』巻一、志貴皇子) 碑について、後に次のように語っている。「地は明日香川のほとり甘粕丘の小丘の中腹である。飛鳥の四囲を見渡し、今も女官の袖を吹き返す飛鳥風が飄々と吹く風をよみがえらすことができる。のみならず、古代宮廷のいきづかいまで、ここは再現できるのだ」(犬養・山内 2007: 12)。かつてのこの場所を通して今のこの場所をみる・感じる、さらに進んで、今のこの場所を通してかつてのこの場所をみる・感じる、この双方向の見立てのメタファーが、歌碑によってもたらされることが述べられている。

このように、文学碑のなかには過去見立てのメタファー (2)・(3) を喚起するために建てられるものもある、いや、むしろそれこそが文学碑の存在意義かもしれない。文学碑が

16) このメタファー (4) でモニュメント (的な存在) になるのは前章でみた大垣「ミニ奥の細道」のような事例であり、文学碑以外の事例としては、「ミニ中山道」(岐阜県中津川市)、「覚王山八十八ヶ所霊場」(名古屋市) などがある。「ミニ中山道」はメトニミー (1) によって現実の場所とつながる、「ミニ奥の細道」と似た事例、「八十八ヶ所霊場」はメトニミー (2) で「歴史的」といった特性が付与される事例である。いずれもモニュメント的存在ではあるが狭い意味のモニュメントとはいえない。

これほど多く建てられ、多くの文学碑に関する書籍やパンフレットにみられるように、文学碑めぐりが観光の1ジャンルとして成立しているのは、単に標識ではない、見立ての喚起装置として文学碑が位置づけられていることの表れであるように思える。

一般のモニュメントでも、碑を前にして、上記のような双方向の見立てのメタファー(2)・(3)が起こる。例えば、著名な歴史的事件のモニュメントは、(往々にして小説や映画などのメディアを通しての知識に依存するが)かつてを通して今を、あるいは、今を通してかつてをみる・感じるという双方向のメタファー(2)・(3)を喚起しうる。災害の現場に建てられた慰霊碑は、災害の記憶が濃い時期には特に、こうしたメタファー(2)・(3)を喚起しやすいと思われる。

また、これらと類似して、(メトニミー(1)・(3)ではなく)メトニミー(2)、つまり特性のメトニミーかつメタファー(2)・(3)の事例もある。「進歩」、「自由」といったタイトルの付けられた(多くは具象的な女性像、男性像である)こうしたモニュメントが特性のメトニミーに基づくことは上で確認したが、これらも、やや特殊とはいえ、見る側の思い入れや経験によっては、かつてを通して今を、あるいは、今を通してかつてをみる・感じるという双方向のメタファー(2)・(3)を喚起しうる。

以上みてきたことは、メタファー(1)・(3)(かつメトニミー(1)・(3))についても同じである。メタファー(1)・(3)かつメトニミー(1)・(3)とは、そこを他所に、あるいは他所をそこに見立てつつ、その場所を記念することであるから、そうしたモニュメントはあまり一般的ではない¹⁷⁾。しかし、例えば旧軍用地に建てられた、そこにゆかりのある部隊の慰霊碑の前で感極まり、あたかもそこが戦場など遠く離れた別の場所であるかのように感じたり(メタファー(1))、逆にその場所を通して戦場など別の場所を感じたりする(メタファー(3))ことは起こりうる。他にも、ある人物の生家にある顕彰碑を目にして、その人物の活躍した地をそこに見立てる、またそこを活躍した地に見立てる(それぞれメタファー(1)、(3))、あるいは、宗教的なモニュメントによって、そこを聖地に、また聖地をそこに見立てる(それぞれメタファー(1)、(3))など、事例が想定できる。また、メトニミー(2)かつメタファー(1)・(3)の事例もある。例えば、各地の被爆樹木2世は、「平和」・「反核」という特性を提示し(メトニミー(2))、かつ、そこを広島・長崎に、広島・長崎をそこに見立てさせる(メタファー(1)・(3))。同様に、楠木正成父子の像は、かつては「忠義」、「殉国」といった特性を示し、彼らがいた湊川や桜井といった場所とそことの間の見立てを喚起していた。

このように、一般のモニュメントでもメタファーがモニュメントに意味の深みや多様さをもたらしている。ただし、一般のモニュメントの場合、メタファーが喚起されるには、そのモニュメントに表現された歴史的事件や犠牲者に対する知識と強い思い入れが必要なのではないか。ほとんどの場合、モニュメントは碑文や解説プレートを読んでそれでおしまいであろう。その意味で、見立てのメタファーは喚起されにくいと思われる。しかし、文学碑だけでなく一般モニュメントでも、メタファーが意味作用において重要な役割を果たしていることは明らかである。

17) 文学碑の場合、II3(1)でみたように字義的に正しい別の場所に建てられたものがメタファー(1)・(3)の中心であるが、字義的に正しいか否かというのはテキスト上の概念であり、文学碑にしかありえない。その点は文学碑とモニュメントとの違いであるといえる。

文学碑と一般のモニュメントとは基本的には変わるところはない。文学碑の場合も、メタファーの意味作用は常に起こるものではなく、必須でもないことは、上述した通りである。ただし、文学碑では碑表の歌や句などにかつてのその場所の風光が明記されている。一般モニュメントのように過去に対する十分な知識や関心がなくても、碑を読むだけで、見立てのメタファーが起きやすいといえる。その点では一般モニュメントと文学碑の意味作用は異なっており、それはそれらがメディアとして差異を有するということであろう。

なお、ここで見てきた一般モニュメントの見立てに対しては、それらは見立てではないという異論も予想される。つまり、戦争慰霊碑や津波のモニュメントなどを前にした見立てとして上でみてきたことは、実際には、犠牲者（特定の他者でもよい）と自らを同一視する感情移入であり、「見立て」といった軽いものではないといったことである。こうした異論に対して、ここでは野矢による「眺望点」という見方を提示しておきたい。野矢（1999：69-80）は、「他人の痛みはなぜわかるか」という哲学的問いに対して、私と他者ではなく「ここ」と「あそこ」の違いとして解消できると論じている。つまり、他者がわかるとは、単に、別の「眺望点」からの眺め（「視点」すなわち視覚だけでなくあらゆる知覚・感覚を含む）を想像するということであり、それは見立てであるといえよう。野矢のこの「眺望点」は、認知意味論、そして広くは空間論とたいへん親和的な議論であるといえる。

IV おわりに

本稿では、モニュメントをメディア、かつ多義的なテキストととらえ、モニュメントが場所との関係のなかで、どのような比喩的意味作用をみせているか明らかにすることを試みた。まず、岐阜県・愛知県の文学碑の事例から、メトニミー、メタファー、シネクドキという3種の比喩が具体的にどのように読み取れるか明らかにした。メトニミーは、あくまで可能性としてはあるが、あらゆる文学碑の意味作用に関わっている。メトニミーが作用しない文学碑、すなわち、その場所と何らゆかりがなく、その場所の特性に結び付けられることもできそうにない文学碑というものは、およそ想像しがたい。そしてこのことはモニュメントの基本原理でもある。次に検討したメタファーは、メトニミーに比べれば目立たないものの、その場所と他の場所という場所間の類似性・見立てに加えて、現在のその場所とかつてのその場所との類似性・見立てまで含む。多くの文学碑で働く、重要な意味作用であるといえる。最後のシネクドキは、メトニミーと重複するものの、文学碑が存在することで場所が典型的にみられる可能性があるということであり、これも重要な意味作用であることが示された。

文学碑の検討をふまえ、次にモニュメントの場所に関わる意味作用を3種の比喩から整理し、そこにみられる特性を論じた。モニュメントは、メトニミー (1)・(3)、そしてメトニミー (2) によって成立し、かつそれらメトニミーを作用させるメディアとして定義される。メトニミー (1)・(3) とは、その場所あるいはモニュメントそのものと、(過去の) 様々なこと、人との関わりがモニュメントによって示されることであり、「様々なこと」、すなわちゆかりには顕彰団体の活動も含まれる。一方、メトニミー (2) は狭義の記憶に関わるモニュメントの意味作用ではなく、その場所と何らかの特性との関わりがモニュメントによって示されることであり、シネクドキ (1) と重複してみられる。このメ

トニミー (2) まで含めて、モニュメントの多様な意味作用を論じる必要があることを示した。そして、モニュメントの一部は、文学碑についてみたとおり、主に場所間の類似性・見立て、現在のその場所とかつてのその場所との類似性・見立てというメタファーによって成立し、あるいはそうしたメタファーを喚起するメディアである。メタファーはモニュメントに意味の深みや多様さをもたらす意味作用であり、こうした見立てのメタファーは文学碑に起こりやすいことも示した。

モニュメントは、メトニミー (+シネクドキ)、メタファーの意味作用によって、場所と関わるものとして構築されている。本稿はモニュメントに共通する意味作用を重視し、その解明にあたってきた。ただし、ここまでの検討からは、文学碑のモニュメントとしての特殊性も垣間みえる。モニュメントとしてひとくりにされるメディアの多様性と、それらにおける意味作用の差異とを解明することは今後の課題である。

【付記】本稿は「2011年度人文地理学会大会」と2012年の「地理哲学研究会」(木岡伸夫・現関西大学名誉教授主宰)で口頭発表した内容をもとにしている。口頭発表時にコメントを頂いた木岡先生をはじめとする皆様によろしくの論文化を報告するとともに、改めて感謝申し上げたい。

文献

- 犬養孝・山内英正 2007. 『犬養孝揮毫の万葉歌碑探訪』和泉書院.
- 岩崎 稔 2008. 記念碑と対抗的記念碑. *Quadrante* 10:47-56.
- 上杉和央 2009. 記憶のコンタクト・ゾーン：沖縄戦の「慰霊空間の中心」整備をめぐる地域の動向. *洛北史学* 11:47-72.
- 小川伸彦 2002. モノと記憶の保存. 荻野昌弘編『文化遺産の社会学：ループル美術館から原爆ドームまで』34-70. 新曜社.
- 大平晃久 2010. 比喩による場所の言語的構築. *地理学評論*83(3):270-287.
- 小野敬子 2008. 『新見南吉詩碑の散歩道』中日出版社.
- 楠見 孝 2005. 認知心理学からみた比喩. *日本語学* 24(5):26-36.
- 栗田 勇 2017. 『芭蕉上』祥伝社.
- シルバーストーン, R. 著, 吉見俊哉・伊藤守・土橋臣吾訳 2003. 『なぜメディア研究か：経験・テクスト・他者』せりか書房.
- 新谷尚紀 1991. 『両墓制と他界観』吉川弘文館.
- 瀬戸賢一 1986. 『レトリックの宇宙』海鳴社.
- 瀬戸賢一 1997. 意味のレトリック. 卷下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』93-177. 研究社出版.
- 竹田直樹 1997. 『日本の彫刻設置事業：モニュメントとパブリックアート』公人の友社.
- 辻 幸夫 2003. 認知言語学の輪郭. 辻 幸夫編『認知言語学への招待』3-16. 大修館書店.
- 野矢茂樹 1999. 『哲学・航海日誌』春秋社.
- 弘中 孝 2004. 『石に刻まれた芭蕉：全国の芭蕉句碑・塚碑・文学碑・大全集』智書房.
- 宮沢康造・本城靖編 2006. 『新訂増補全国文学碑総覧』日外アソシエーツ.
- 森 雄一 2002. 隠喩は二重の提喩か?. *成蹊大学文学部紀要* 37:73-84.
- ラネカー, R. 著, 坪井栄治郎訳 2000. 動的の使用依拠モデル. 坂原茂編『認知言語学の発展』61-143. ひつじ書房.
- レイコフ, G. 著, 池上嘉彦ほか訳 1993. 『認知意味論』紀伊国屋書店.
- 吉田 弘 1979. 『愛知の文学碑：碑に見る文学史』愛知県郷土資料刊行会.
- Duncan, J., Duncan, N. 1988. (Re)Reading the landscape. *Environment and Planning D: Society and Space* 6:117-126.